
あかのおうじさまとあおのおひめさま

坂上ジュンヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あかのおうじさまとあおのおひめさま

【Nコード】

N82410

【作者名】

坂上ジュンヤ

【あらすじ】

赤の国の王子さまと青の国のお姫さまの話を
童話調の文体でお届けします。

…赤の王子さまは人々からとても恐れられていました。
そんな王子さまに、お嫁さんが来ることになりました。
青の国の心根の優しいお姫さまです。…

きつとハッピーエンドを目指して進みます。

たまに放送コード的に不適切な単語やシーンが出る場合もありますので、敏感な方はご注意くださいませ。

世界観について

【赤の国】

大陸で一番大きく強い国。

国民はほとんどが赤を基調とした髪色をしている。

王族は特に透き通るような紅色。

王、王妃が相次いで亡くなり、

現在国を治めているのは先王第一子エルヴィーナ「イヴ」ローゼス。

赤の国の貴族にとってミドルネームは

親族や大切な人だけに呼ぶことが許される“親愛なる名”である。

【青の国】

領土が小さく、国力も弱い国。

国民はほとんどが青を基調とした髪色をしている。

王族は特に青空を映したような青色。

比較的平和主義者が多く、他国との平和を結ぶことに尽力している。

【黄の国】

領土は小さいものの、資源が豊富で交易などで栄える国。

王族はきらめくような黄の髪をしており、

国民は黄を基調とした髪色をしているが、

移民なども多いため、人々の髪の色は雑多。

基本的に領土拡充のための戦争はしないが、

自国の資源を守るための軍隊は赤の国と拮抗できるほど強い。

プロローグ あかのおうじさまのうわさ

昔々、ある所に、一つの大陸がありました。

さして大きくもないその大陸の中には、三つの国がありました。

一番強くて大きいのが、赤の国。

その赤の国に半ば吞まれるようにして小さな黄の国と、

これまた小さな青の国がありました。

赤の国は、大陸の三分の二を支配してもなお、

その領土を広げようとするので、国境の辺りでは良く戦争が起こるのです。

赤の国が恐れられているのは、単に大きいからだけではありません。赤の国には、とても戦いの強い、恐ろしい王子さまが居たのです。

その王子さまは戦がとても強くて、並みの兵士では、

どれだけ束になっても敵いませんでした。

その王子さまは、赤い髪を他人の血でさらに赤く染めながら、狂ったように笑うのだと、

他国のものだけでなく、赤の国の住人すらも恐れ怯えるのです。

だけど誰も、本当のことは知りません。

戦場でその王子さまに出会ったものは生きて帰れないと言い、

戦場以外で王子さまは人前に姿を現さないと言い、

誰もが風の噂で怯えるだけなのです。

だから誰も、王子さまのほんとうの事は知りませんでした。

(一) はじめまして

昔々、赤の国には『狂犬』とすらあだ名される恐ろしい王子さまが居ました。

その王子さまの名前は、バルベリトⅡアベルⅡローゼス。

ある時、王子さまが戦場いくさばから帰ってくると、赤の女王さまが優しく声をかけてきました。

赤の女王さまは、王子さまのお姉さんです。名前はエルヴィーナⅡイヴⅡローゼス。

まだ20の齢を少し超えたほどの若く美しい女性ですが、両親である王さまとお妃さまが早くに亡くなってしまったので、今はお姉さんのエルヴィーナが女王として赤の国を治めているのです。

男子である王子さまが王位につくのではないかと？

という話題が赤の国を賑わせたこともありました。

しかし、姉のエルヴィーナは正室のお妃さまの子どもでしたが、弟のバルベリトは王さまが見初めたある町娘の子どもだったのです。正当な血筋を重んじる王家にとって、

平民の血が混じるバルベリトはとても王位継承者とは認められないのです。

ただ、先の王さまがバルベリトをとて愛していたので、

バルベリトは王子さまとして、王宮で暮らせているのです。

女王さまは王子さまを呼びとめると、楽しそうな様子で言いました。「お帰りなさい、ベリト。今日はアナタにね、とても良いお知らせがあるのよ」

王子さまはそれを聞くと、口の端だけを釣り上げてとても皮肉っぱ

く、

「なんだ、腕のいい暗殺者でも雇えたのか？」

と言いました。女王さまはそれを笑って流すと、やっぱり嬉しそうに「違うわよ。アナタに、お嫁さんが来たの」と微笑みました。

「は？」

「青の国と今度平和を結ぶことになってね。」

その証として、ベリトと青の国の姫との婚姻を結ぶのよ」

眉根を寄せて困惑する王子さまに対して、女王さまはとても穏やかにそう説きました。

そして、

「西の客間にお待たせしているから、身なりを整えたらすぐお迎えに行きなさい。」

…あまりレディを待たせるものではないわよ」

と、少し悪戯そうに笑って言い残し、上品な足取りで去って行きました。

残された王子さまは実に不機嫌そうな顔で、しぶしぶ西の客間へ向かったのです。

西の客間の扉を王子さまがやや乱暴に開けると、

一人の女性が驚いたように目を丸くして王子さまを見ました。

そのふわりとした髪も、大きな瞳も透き通るような青で、

王子さまはすぐ察しがつきました。

「アンタが、青の国から来たってヤツ？」

やや不躰に王子さまが問うと、女性はすぐふわりと笑い、

鈴を鳴らすような声で答えました。

「ええ、はじめまして。青の国より参りました。フィオナ＝ブリュ

レイと申します。」

「ああそう、もう知ってると思うけど、俺はバルベリト。」

「はい、これから、どうぞよろしくお願いいたしますね。」

王子さまがどれだけぶっきらぼうに話しても、

青のお姫さまはとても優しく、にこにこ微笑むのでした。

王子さまはそんなお姫さまを胡散臭そうなものを見る目で見て、ため息をひとつ吐き、

「アンタ、ちよつとこつち来なよ」

と、お姫さまを連れて、客間を後にしました。

こつん、こつん、と足音がやたらに大きく反響します。

王子さまはお姫さまを連れて、お城の地下へ向かっていました。

階段を下りるたびに、空気は徐々に冷え、まるで真暗な闇に飲まれていくようでした。

お姫さまが少し不安になって、王子さまに声をかけようとした時、ちょうど階段が終わり、

王子さまはその一番下にある扉を開きました。

「ここ、入りな。」

王子さまが促すその扉の向こうは、罪人を閉じ込めておく牢獄でした。

今は誰も入っていないようでしたが、重く暗いその空気は、心を締め付けるのに十分でした。

王子さまはその牢獄の一番入り口に近い所にある、少ししつかりした木の扉が付いている部屋に入って行きました。

お姫さまは慌てて王子さまの後を追いかけてきました。

王子さまが入って行った部屋は、牢獄のそれに比べれば多少はましでしたが、

それでも、薄暗いランプに古びたベッド。

淀む湿っぽい空気は、人が住むのに快適とは言えないものでした。
王子さまはその部屋のベッドに倒れ込むと、お姫さまの方を少しだけ見て、

「ここが、俺の部屋」と言いました。

「え？」

「地下の牢獄の隣。湿っぽくて暗くて冷たい、この部屋が俺の住処。…な？俺とまともに婚姻結んでも、良い暮らしなんか出来ねえよ。…アンタ、所謂人質なんだろ？赤が体よく青を制圧する布石のさ。…俺は構わねえから、その辺の近衛隊長でも捕まえてたらしこめよ。その方がよっぽど良い暮らしできるぜ」

「そんな…私は…」

戸惑いながらも何かを言おうとするお姫さまに、

王子さまは目もくれず、薄い枕に顔をうずめると、

「疲れたから、寝る。アンタも出てって良いぜ」

と、投げつけるように言いました。

お姫さまはそんな王子さまを見ながら、しばらく言葉を探してもじもじしていましたが、

突然何かに気付くと、大きな声をあげました。

「ああ！いいけません！！」

「なんだよ」

王子さまが実に面倒臭そうに顔を上げると、

お姫さまは王子さまの近くまでつかつか歩み寄り、

「そんな汚れたままの恰好で眠るなんていいけません！」

と王子さまを起しました。

王子さまが不機嫌そうにお姫さまの手を払い、

「そんなの俺の勝手だろ」

と言いましたが、お姫さまは全くひるまずに、

「いいけません！ちゃんと休みたいなら、

お風呂に入ってからの方が断然くつろげるんですからね！

お湯を用意しますから、その間に汚れたお洋服、全部脱いでくださ

い！」

とぴしゃりと言い放ち、王子さまの服を脱がせようと思いました。

王子さまもさすがに焦って、

「分かった！分かったよ！脱がすな！脱ぐなら自分で脱ぐから！」と叫びました。

「よろしい」とお姫さまは少し偉そうに言うと、

優しく笑って、お湯を取りに部屋の外へ向かいました。

王子さまがしぶしぶ服を脱いで畳んでいると、

お姫さまはすぐ暖かいお湯を手に戻って来ました。

「さ、バルベリト様。どうぞ」

お姫さまはお湯で湿したタオルを王子さまに渡すと、

今度はすぐに王子さまの脱いだ汚れた服をかついで、

「お洗濯に出してきますね」と微笑んで、部屋を出て行きました。

王子さまは、暖かいタオルで体を拭きながら、

何か心臓の辺りがむずむずするような、

くすぐったいような感じがして、少し眉をしかめたのでした。

(二) ごめんなさい(前書き)

あの、猫が大好きで大好きでたまらない人は、ちょっとお気を付け
くださいませ。

(11) いめんなさい

青のお姫さまが赤の国にやってきてからしばらく経ったある時、お姫さまがいつものように地下にある王子さまのお部屋の前にやってくると、

ひどく興奮したような猫の声がしました。

慌ててお姫さまが扉を開けますと、

赤の王子さまがナイフを片手に猫の尻尾を捕まえています。

猫は右前足から少し血を流していました。

「な、何をなさっているんですか！」

お姫さまが驚きと若干の咎めをないまぜにして叫ぶと、

王子さまは実に何でもないようなお顔で

「何って、こいつうるせーし、どうせ暇だからバラして遊ぼうかと思ってる…」

と言いました。

お姫さまが猫を取り上げ、王子さまに

「いけません！そんなこと！！」

と、叫ぶと王子さまはまさしく

玩具を取り上げられた子どものように口をとがらせました。

「別に、お前が痛いんじゃないんだから良いだら…」

王子さまがそう言うか言わないかのうちに、

お姫さまの目にはみるみる内に涙が溢れてきます。

さすがにバツが悪くなって、王子さまはナイフを放り出し、

「分かったよ」

とぶつきらばうに呟いて、ベッドに腰をおろしました。

お姫さまは少し涙目のまま、ほうつと息を吐くと、

血を出している猫の右前足の様子を見ました。

「良かった、傷は小さいですね」

「だって最初からでかい傷つくったらすぐ死んじまってつまんねえ

し……」

「そういうことじゃありません！」

言い分をぴしゃりと打ち落とされて、

王子さまは面白くなさそうにますます口をとがらせました。

そんな王子さまを尻目に、

お姫さまは机の上に置いてあつた薬箱を使つて

テキパキと猫の手当てを済ませました。

お姫さまはすっかり落ち着いた猫を抱きながら、

まだ不貞腐れている王子さまの方をちらりと見て、

何かを思いついたように、声をあげました。

「そうだ！」

「何だよ」

「今日はとても良いお天気なんです。

お部屋の中にこもっていたらもったいないもの、

どうせ暇なら、お外に出てこの子とゆっくり日向ぼっこでもしまし

よう？」

お姫さまは猫を抱えて、優しく笑いました。

王子さまの部屋は、お姫さまが来てから、

やれ「お布団はちゃんと干さないといけません」、

やれ「ランプはきちんとお掃除して、お花くらい飾りましょう」な

ど、

あれこれと世話を焼いたので、以前よりはずっと快適になっていま

したが、

それでも地下の暗い空気というものは拭い切れるものではありません。

ん。

「さあ、そうと決まれば早速まいりましょう！」

「ちょ……っ、引つ張るな、分かったから！」

お姫さまは渋る王子さまを半ば無理やり、

赤の王城自慢のバラのお庭に連れ出しました。

お外は雲ひとつない晴天。

お姫さまの髪の色のように美しい空でした。

暖かい風に頬を撫でられて、王子さまは小さく息を吐きました。
しばらく嬉しそうにバラに見とれていたお姫さまは、

不意に王子さまの方に目を上げて、

眩しそうに目を細めて微笑みました。

「この国の方の髪は、お日様の下だと、ますます綺麗ですね」

「俺の髪も？」

「ええ、日の光がキラキラ透けて、とっても綺麗です。」

ニコニコ幸せそうに笑うお姫さまから視線をそらして、

王子さまは吐き捨てる様に言います。

「俺は、嫌いだ」

お姫さまがその言葉に不安げに目を丸くすると、

王子さまは喉を吐き出すような声で続けました。

「王族ならな、エルヴィーナみたいな、明るい火の様な色なんだ。

俺は父上が平民に産ませた子だから、こんな濁った血の様な色なん

だと、言われる」

それを聞いたお姫さまは少し目を丸くして、

それでもすぐに慈しむような目で王子さまを真っすぐ見ました。

「そんなことないです、とても綺麗な色ですよ。」

王子さまは少しムキになって、やっぱり吐き捨てるように、言いました。

「こんな血の色が？」

「あら、暖炉の暖かい炎の色です」

「腐った林檎の様な色だよ」

「いいえ、甘い手作りのイチゴジャムの色です」

「錆びた鉄屑の色だ」

「素敵なルビーの色です！」

真っすぐに言葉を返されて、

言葉に詰まった王子さまはぷいっと顔をお姫さまからそらしました。
お姫さまは王子さまに、とても優しく続けます。

「バルベリト様がここに居らっしゃること自体が、お父君から愛
されていた証です」

お姫さまの優しいその言葉は、まるでザラメを塗した飴玉の様に甘
いものでした。

王子さまは少し眉を寄せて、言いました。

「愛されてた、ね…。俺は全然覚えてない。母上は俺を産んですぐ
死んだらしいし、

父上の顔も、もう良く思い出せない。

…覚えていない事なんて、無かったことと同じじゃないのか」

お姫さまは、俯いてしまった王子さまの髪を、

少し背伸びして優しく撫でると、ちよっただけ強い声で言いました。

「それなら、これからたくさん教えて差し上げます！」

「は？」

「良いですか、バルベリト様には、もう私が居ます。

他のどなたが何を言おうと、私はバルベリト様を愛していますから。

「

そうしてお姫さまは真つすぐに微笑みました。

王子さまは、何か苦しい様な、くすぐったいような気がして、

お姫さまからまた目をそらすと、

「馬鹿」

とだけ呟きました。

お姫さまはそれを聞くと、少し悪戯そうに

「あら、愛とはことごとく、愚かなものですよ」

と笑いました。

王子さまがどうしたらいいか分からずに、口を噤んでいると、

お姫さまが何かを思いつき、猫を抱きあげて王子さまに言いました。

「それじゃあバルベリト様、この子に謝ってください！」

「は？」

「間違ったことを注意するのも、愛情の一つです!」

お姫さまは真つすぐにそう言うと、

すっかり期待を込めた目で王子様を見ました。

「…間違ったこと?」

「ええ」

「何か、俺間違ったことしたか?」

「え?」

「俺、何か間違ったことしたか?」

王子さまは本当に分からないような顔で尋ねました。

お姫さまは少し迷った後に、ゆつくりと返しました。

「生き物を傷つけるのは、悪いことです。

だから、この子にちゃんと謝ってあげてくださいね」

王子さまは少し考えた後に、

「人間を殺すのも、悪いことか?」

と問いました。

お姫さまは少し悲しそうな顔で、

「ええ、とてもいけない事です。」

と答えました。

王子さまは目をギュツと閉じて、しばらく何かを考えていたようですが、

ゆつくり目を開けて少し迷ったように言葉を繋げます。

「…でも、エルヴィーナは、俺が人を殺すとしても褒めてくれた。

たくさん殺すほど、たくさんたくさん褒めてくれた」

お姫さまはやっぱ悲しそうに、答えました。

「…女王さまが何を考えていらっしゃるか分かりませんが、

私は、人を殺すのは一番いけない事だと思います。」

王子さまはそれを聞いて、また目を閉じて何か考え込みましたが、
やがてまたゆつくりと目を開いて猫を見つめ、

「…ごめんなさい」

と小さな声で言いました。

お姫さまはそれを聞いて、とても優しく笑いました。

「もうしませんよね、バルベリト様」

「ああ…」

小さく頷く王子さまに、お姫さまはやっぱり、とても優しく笑いかけました。

しばらくして、お姫さまは空を見上げて、

「あら、少し天気が崩れてきましたね」と言いました。

「中に戻りましょうか、バルベリト様」

中に戻ろうと足を進め始めたお姫さまの背中に、王子さまは声をかけました。

「…おい」

「何でしょう？」

振りかえったお姫さまに、王子さまは少しうつむき気味に言葉を続けます。

「…お前は、俺の妻、なんだよな」

「ええ、そうです。」

「お前は俺を愛するし、俺も、お前を愛するんだよな」

「そうですね、そうになると、とても素敵ですね」

お姫さまがそつとそう言うと、王子さまはまた少し考え込んだ後に言いました。

「じゃあ、お前に、親愛なる名を覚えておく」

「親愛なる、名？」

「赤の国の貴族のミドルネームだ。」

家族や大切な奴にしか教えない名前。それを覚えておく

「よろしいんですか？」

お姫さまが少し心配そうに問うと、

王子さまは、少しだけ笑って、「ああ」と答えました。

「…アゼル。バルベリト」アベル」ローゼスが、俺のフルネームだ。覚えておけ、フィオナ」

王子さまは少しでも優しい声でそう告げました。
お姫さまはとても嬉しそうに微笑んで、「はい」と染み込ませるように頷きました。

女王さまの執務室からは、赤の王城自慢のバラのお庭がとてもよく見えます。

女王さまは執務の傍ら、

珍しく庭に出てきた王子さまを、執務室の窓から眺めていました。

王子さまはお姫さまと一緒にになにかたくさん言葉を交わし、

最後には少しでも微笑みました。

女王さまはそれをずっと見ていました。

王子さまの様々な表情を、ずっと見ていました。

やがて女王さまの執務室から、

ぱきん、と一本の羽ペンが折れる音がしました。

(二) いじめんなさい(後書き)

なんかとっても駆け足展開です。勢いだけですみません。
あと猫さんごめんなさい。もうしません。

（幕間） あおのおひめさま（前書き）

台詞だけで書いてみます。

時系列的には、（二）と（三）の間くらいですが、

本筋から少しお休みして幕間ということでご容赦いただければ…。
王子さまとお姫さまの普段の会話はだいたいこんな感じです。

（幕間） あおのおひめさま

「お前って、一応青の国の姫なんだよな？」

「ええ、上と下に、兄と弟が一人ずつ居ますけれど、れっきとした第一王女ですよ」

「その割には、姫っぽくないよな。掃除も洗濯も手慣れてるし、たまに土いじりはしてるし、世話焼きだし」

「あら、別に出来て困るものではないでしょう？」

「そりゃそうだけど、普通オヒメサマって言ったら、召使にあれやこれややって貰えば済む話だろ？」

「だからそういうのって出来ないもんだと思ってただけだよ……」

「まあ……赤の国くらい大きな国でしたらそうなんでしょうが、青の国は小さいですから、王族といえど、

安穩と座についているだけの生活など出来ません。

農作業のお手伝いもしますし、

着るものだって自分で繕えるくらいにはなっていますよ」

「ふーん」

「……そうだ！バルベリト様も何か作ってみましょう！」

「は？……い、いや、でも俺は別に作れるものなんかねえし……」

「最初は誰でもハジメテから始まるものです！何事も挑戦してみるのが大事ですよ。」

「……そうですね、バルベリト様は刃物の扱いが得意な様ですし、木彫りでもしてみましようか」

「……木彫り……ねえ。……ナイフの使い方は、戦の時と同じで良いのか？」

「うーん……ちよつと違うでしょうね。」

「一緒に作ってみましょう。ほら、薪の小さいものを使って……」
「ああ」

「……バルベリト様、それは……フクロウか何かですか？」

「……猫だ」

「……まあ、最初ですから！何個か作っていけば、

すぐに格好良い木彫りが作れるようになりますよ！」

「本当か？」

「ええ、バルベリト様、筋はとも良いですから、

コツをつかめばあつという間ですよ！」

「……じゃあ、続けてみる事にする」

「はい、それがいいです」

「……お前は、何の動物が好きなんだ？」

「私ですか？……そうですね……。うさぎさんなんかが好きですよ」

「うさぎか……難しいな」

「え？」

「……まあ良い。ちゃんとしたのが作れたら、お前にやる」

「本当ですか？ふふ、楽しみにしていますね」

「ああ」

（幕間） あおのおひめさま（後書き）

王子さまはすこぶる不器用なんです。

(三) ことわる

青のお姫さまが赤の国にやってきて、また少したったある時、

王子さまは突然女王さまに呼び出されました。

王子さまは玉座の間に行くのがとても嫌いでした。

女王さまの側付きの貴族たちが、

王子さまを平民混じりだと馬鹿にするからです。

ですからこの時も、

王子さまはひどく重い足と気分を引きずって玉座の間に向かいました。

玉座の間は不必要なほどに広く、豪華な装飾が満ちています。

きらめくばかりの玉座、左右に侍る貴族高官たちも、

赤の国の大きさに見合うだけのものとして備えられているものですが、

王子さまにはそれが、動物が身体を膨らませて威嚇しているような、酷く空っぽなものにしか見えないのでした。

女王さまは王子さまが入ってくると、玉座で優雅に一つ微笑みました。

そして側付きの貴族に視線を送り、王子さまに一枚の羊皮紙を渡させました。

王子さまがその紙に目を落とすと、それは、

黄の国との国境の一部に大きなバツ印が付けられている赤の国の地図でした。

王子さまがそれを確認したのを見ると、女王さまはとても優しく話し始めました。

「ベリト、実は今ね、黄の国と少し小競り合いが起きているのだけれど、

あまり状況が思わしくないの。少しお手伝いに行ってちょうだい。

……良かったわね、ベリト。黄の国の軍は手ごたえがあつて好きでしょう?」

どこか嬉しそうに言う女王さまの言葉を聞いた後、王子さまは少し目をつむり、

そしてゆっくり目を開き、羊皮紙を放り投げると、一言告げました。

「断る」

女王さまは意表を突かれたように一時目を見開きましたが、すぐに柔らかく微笑み、

「何故?」

と問います。そして続けて、

「武具に不備があるなら、新しいのを与えるわ。

剣も手甲も、欲しいのなら何でも言いなさい?」

と優しく問いかけました。

王子さまはその言葉に、少し悲しそうな顔で小さく、

「…エルヴィーナは、昔から俺に武器しか与えてくれないな」

と呟きました。

女王さまが軽く眉を寄せたのを見て、

王子さまは少し顔を引き締め、強い声で言いました。

「俺はもう、戦には出ない。

赤の国だって、もう十分大きくなった。

これ以上戦を起こす必要もないだろう?」

女王さまは目を閉じ、もう一度王子さまに問いました。

「何故、突然、そんなことを言うの?」

王子さまは強い声で、

「約束をした」

と答えました。

「フィオナに、人を殺すのは悪いことだと教わった。

そして、もう、生き物を傷つけることはしないと、約束をした。

「だから、俺はもう戦に出ない」

王子さまが毅然として告げると、女王さまはゆっくりと微笑んで、

「そう、フィオナ嬢は良い娘ね。約束は守らないといけないものね。

…分かったわ。ベリト、下がって良いわよ」

と告げました。

王子さまは宮廷儀礼に従い一礼すると、足早に玉座の間を後にしました。

王子さまを送りだした扉が沈黙してから少し経って、

女王さまが口を開きました。

その声はあまりにも冷たく、

善良な人間が耳にしたら卒倒しかねない程の棘を孕んでいました。

「…牙を無くした番犬は、もういらないわ」

(四) しんあいなるなまえ

王子さまが女王さまの命令を断った次の日、

王子さまが一人で寝台で休んでいると、

突然5、6人の兵士がノックもなしに王子さまの部屋へ入ってきました。

あまりにも不躰な乱入に気を害した王子さまはナイフを片手に取り、低い声で問いました。

「何の用だ」

それに答えようとした兵士の一人を、細い腕が制します。

兵士の間から女王さまが歩み出ると、

王子さまは皮肉っぽく口の端だけを釣り上げ、もう一度問います。

「…何の用だ？」

女王さまは美しく微笑んで宣告しました。

「バルベリトロローゼス。あなたを国家反逆罪で捕らえます。」

王子さまは少し目を見開き、けれどすぐに皮肉っぽく返します。

「俺が女王サマの命に口答えしたからか？」

そのぐらいで国家反逆罪だなんて、実にめでたいね！」

女王さまは冷たく笑って、

「あなたは我が軍の兵すら多数その手に掛け、人心を乱しました、よって拘束し、余罪を問います」

と続けました。

王子さまはいよいよ声を荒げ、

「赤の兵士を手に掛けただ？」

悪いが俺にだって自国と他国の兵の見分けくらいつく！」

「言い訳は獄で聞きます。さあ、おとなしくなさい」

無茶苦茶な、筋の一つも通っていない宣告でした。

「ふざけるな！」

王子さまは一つ怒鳴り、ナイフを握り直して、無理にでも兵士の壁を抜けようと、

地面を蹴りましたが、すぐに女王さまの、

「姉さんに逆らうの？ベリト」

という、ぞつとするほど冷たい言葉に、動きを止めました。

女王さまは変わらず張り付けたような笑みで王子さまを見つめているだけに、

王子さまの呼吸はどんどん乱れ、冷たい汗が噴き出してきました。

王子さまが小さい頃から、女王さまは王子さまを支配し、虐げてきました。

女王さまと同じ目線で向き合つと、王子さまはどうしても心が乱れて…

どうしても、女王さまに手をあげる事が出来ないのでした。

動きが鈍った王子さまを、数人の兵士が引き倒し押さえつけ、頑丈で冷たい鎖で王子さまを捕らえました。

我に返って逃げようともがく王子さまの後頭部に、

無慈悲な衝撃が落とされ、

王子さまの意識はあつという間に暗闇に沈んでしまいました。

一方その頃、青のお姫さまがハツと目を覚ますと、

そこは見慣れない、物置の様な小屋の中でした。

キョロ、と辺りを見回しても、そこは全く見覚えが無い所でした。

少し埃っぽい空気の中を、入口まで歩いていき、少し戸を揺らそうとしましたが、

外から低い話し声が聞こえてきて、お姫さまは扉に耳を押しつけました。

薄い木の扉の向こうからは、兵士が2人、低い声で愚痴る声が聞こ

えてきます。

それは退屈な見張りを押しつけられた不満と、暴力王子さまが地下の牢獄に捕まったことを揶揄したりといった話でした。

お姫さまは、本能的に危機を察しました。

兵士の言葉に耳をすまし、王子さまがどこにいるのかを聞き取るとすぐに小屋の中に視線を戻し、脱出できそうな所を探します。

幸い、少し無理をすれば通れそうな小さな窓がありましたので、その窓を外すと、物置小屋の片隅に置いてあった刃物で、

ドレスの裾を膝丈ほどの短さに引き裂きました。

「…少しもつたいないですが…命あつての物種ですしね…。」
動きやすくなった身体を窓に滑り込ませて、お姫さまは小屋を飛び出しました。

冷たく重い感覚に王子さまが目を覚ますと、

そこは一番罪の重い者が入れられる、城の地下の独房のようでした。頭がまだズキズキと痛む上に、絶対に暴れられないように、

両腕を頭の上で一つに、重く冷たい鎖で縛りあげられています。

両足にも重い枷がはめられていて、とても動かすことはできませんでした。

この独房は、重罪人の拷問にも使われるので、音が外に届くことはありません。

騒いでも仕方のないことを知っていた王子さまは独房の扉が開くのを、

ただ待つことにしました。

それからいくらか経ったでしょうか。

独房の入り口の扉が少し開き、見張りの兵士が何事か声を上げ――、独房の入り口から女王さまが入ってきました。

王子さまが眉に皺を寄せて女王さまを見上げると、

女王さまは独房の扉を閉め、王子さまに足音もなく歩み寄りました。王子さまは座り込むような形で拘束されていたので、

ちょうど女王さまが王子さまを見下ろす形になります。

女王さまは王子さまの姿をじつくりと、

実にじつくりと見ると、少し微笑んで問いました。

「ご機嫌いかが？ベリト」

「良いように見えるか？」

王子さまが皮肉っぱく返すと、女王さまは少し目を伏せ、

「そうね、鎖は冷たいものね……」

と呟きました。

しかし、すぐに口角を上げ、

「でも、凄く良いザマだわあ、ベリト」

と吐き出しました。

その笑顔は、まるで獲物に手を掛けた悪魔のような、酷薄なものでした。

王子さまが唇を噛んで見上げると、女王さまは少し眉を寄せて、

「何かしら？……吐き違えないで。アンタは今私に命を握られているのと同じよ」

と投げつけるように言いました。

そして滔々と話し始めます。

「…アンタの言った通り、この国は大きくなったわ。

…けれどね、大きい国になればなるほど、失うものだって多くなる…。」

女王さまはそこで一旦言葉を切り、

憎しみと嫉妬に満ちた目で王子さまを睨みつけて怒鳴りました。

「この国に、この立場に生まれた時から、私達は欠けているの！

アンタだけ満たされて人間になるうだなんて、絶対に許さない！！

……私はね、アンタも、父様も大嫌いよ。

平民の女なんかを孕ませた父様も、

男っただけで上の継承権を得られるようなアンタも……！

母様が力を尽くしてくれなきゃ、

アンタが第一継承者だったなんて…吐き気がするわ！」

確かに、赤の国は代々男子が王位継承者でした。

王さまも、愛した女性から生まれた王子さまのことを

王位継承者にしたがつていました。

王妃さまが王さまの死後、

出自の問題から王子さまの継承権を廃したのです。

錯乱にも似た態で叫ぶ女王さまの顔を見上げ、

王子さまは少し寂しそうに呟きました。

「……イヴ」

それは女王さまの“親愛なる名”でした。

「気安く呼ばないで！」

それが王子さま口から零れ落ちた瞬間、女王さまの右手が跳ね上がり、

そこに握られていた乗馬用の鞭で王子さまの頬は跳ね飛ばされました。

「私の“親愛なる名”を、アンタなんか気安く呼ばないで……！！」

乗馬用の鞭は、馬を叩くためのものですので、

それで叩かれるとそれはそれは痛いのです。

王子さまの頭はぐらんと揺れ、口の端は切れて血が滲みましました。

女王さまは小さく呻く王子さまを睨みつけながら続けます。

「今回だって、あの青の娘をアンタがさっさと逆上して殺してくれ

れば、

それを口実に青の国と戦争を起こせたのに…。

アンタ、ああいう手合いは嫌いだろうと思っていたけれど…とんだ誤算だったわ。」

女王さまは実に忌々しそうに吐き捨てると、蔑むように笑いました。

「…ああ、アンタの母親も、あんな感じの女だったわね。

やっぱり、血は争えないってことかしら。

父様もああいう女にころつとたぶらかされたものね。」

「…そんなの…知るか…。あいつは…」

女王さまは小さな声で呻くように零す王子さまの頬をもう一度鞭で張りどきました。

それでも王子さまは絞り出すように問います。

「…あいつは……フィオナは…どうした…」

女王さまのかつての恐ろしい企みを聞いた王子さまは、お姫さまの安否を問いました。

女王さまはそれを聞いて少し微笑んで答えます。

「心配しないで。今は丁重にお預かりしているわ。…今は、ね」

そして女王さまは続けます。

「…ねえベリト。私はあなたが嫌いだけれど…その戦いの力は認めているわ。

あなたが今までと変わらず、赤の国のために戦うというのなら、今は生かしておいてあげる。

…フィオナ嬢だって、返してあげなくもないわ。

…それでもまだ、約束を守りたいだなんて言うのならば…分かるわね。

どうするかは、よく考えなさい。…明日、また来るわ」

女王さまはそう告げると優雅な足取りで独房を出て行きました。

ガチャン、と重い錠の下ろされる音がして、

独房はまた静寂に満たされました。

王子さまは、血の味に染まった唇をかみしめて、考えました。

心臓の鼓動はやかましく、

内臓はまるで掻き回されているかのようにむかむかします。

王子さまは生まれて初めて、内臓がひっくり返るくらい、悩んだのです。

今までなら、悩むことなんてありませんでした。

少し武器を振るえば目の前の気に障るものはすぐなくなったし、

女王さまの命に従っていれば、不便ながらも生きている事は出来たからです。

頭痛さえおこり、今にも吐きそうになった時、

独房の明り取りと換気のために作られている

低い天井付近の格子の向こうから、こつん、と小さな石が投げ込まれました。

王子さまが驚いて顔を上げると、

格子の向こうから、青空の様な瞳が覗きました。

酷く泥だらけな顔のお姫さまは、王子さまを見つけてふわりと笑います。

「情けないお顔。どうなさったんですか？バルベリト様」

久しぶりに聞いたような気さえするその声に、

王子さまは緩みそうになる気を引き締めながら、問いました。

「なに、何してるんだ」

お姫さまは少し笑って、

「バルベリト様が捕まっていると聞いたので…」

と、ひどく能天気に言いました。

王子さまはすぐに声を荒げて、

「馬鹿！無事ならさっさと逃げろ！」

と伝えます。

しかしお姫さまはそれを叩き落とすように、

「私一人で逃げてどうするのです！」

と答えました。

王子さまは、それを聞き、諦めたように息を吐くと、

胸のむかつきを思い出して、眉をしかめました。

そして心配そうに見ているお姫さまに、真摯な声で問いました。

「…お前は、俺を愛していると言ったな」

「ええ」

「…どうしてだ…？」

それはいつもの王子さまからは想像もつかない、弱々しい声でした。お姫さまはその声を聞き、一度目を閉じ、そして息を吐いてゆっくり目を開き、

優しい声で語り始めました。

「…お会いする前は、とても怖い方なんだろうなと、思っていました。

あまりいい噂も聞きませんでしたし…。不安で仕方ありませんでした。

…けれど、初めてお会いした時に…、怒られてしまうかもしれませんが…、

寂しがり屋の、赤ん坊のように見えたのです。

本当はだれよりも純粹で、愛されたがっているのに、

誰も手を差し伸べてくれないから、

周りを傷つけるままに必死に立っている赤ん坊の様な。

…だから、私が愛そうと、思っただんです。」

王子さまは俯いて、

「結局は、同情なのか？」

と問います。

お姫さまはそれでもやっぱり優しく続けます。

「最初は、です。

…一緒にいるうちに、バルベリト様の強い所、優しい所、可愛い所、素敵な所、

たくさん、見つけて…」

お姫さまの声は震え、涙声になっていきます。

「…一緒に、生きていきたいと、思っただんです…願っただんです…！」

お姫さまは涙をいっぱいに溜めたまま、王子さまの方を真つすぐに見て告げました。

「だから、逃げるなら…ううん、死ぬのも一緒です！アベル！」そのお姫さまの叫びは、王子さまの頭に、真つすぐ染み渡って行きました。

目の前のボールが剥がれるように世界は鮮明になり、思考がまとまってきました。

王子さまはお姫さまを見上げると、少しだけ笑って、

「……ありがとう。」

と、初めて告げました。

そして、少し自嘲気味に、

「俺は、弱かったんだな」

と呟きます。

お姫さまは涙目のまま笑い返し、

「そうですね、だから、私が居ないとダメなんです」と囁きました。

王子さまはお姫さまを見つめ、強い声で言いました。

「…一緒に逃げる。逃げるんだ。…フィオナ、馬には乗れるか？」

お姫さまは、しっかりとした声で「ええ」と答えます。

王子さまはそれを聞いて微笑むと、

逃亡のための考えを、お姫さまに伝えました。

そして、日が昇り、次の日を迎えました。

(五) さようなら、あかの、(前書き)

古典表現ですが、放送コードとかに引っかかりそうな単語が出ます。
敏感な方はご注意くださいませ。

(五) さようなら、あかの、

その夕方、独房の中では正確な時間など分かりませんが、お日様が傾いて、少し経った頃でした。

昨日のように、女王さまは独房へやってくると、うなだれている王子さまに問いました。

「答えは出たわよね？ベリト」

王子さまはうなだれたまま、「ああ」と答えました。そして沈んだ声のまま続けます。

「…殺してくるよ。黄の国の兵士、邪魔するやつ、みんな」

女王さまはその答えに満足そうに微笑むと、

「そう、やっぱりベリトはいい子ね」

と、猫なで声で囁きました。

王子さまは女王さまを少し眉を寄せて見上げると、

「分かったら、さつさと鎖を取ってくれ。」

体中痛くてたまらない。」

と零しました。

女王さまは「良いわよ」と微笑むと、

兵士を呼び出し、鎖を外させます。

その作業中、女王さまは何でもない、という風にぼつりと言いました。

「そうそう…青のフィオナ嬢のことだけれど…」

「あいつが何か？」

「…行方不明になったの。お部屋から急に居なくなっただけね…。」

ベリトが捕まったから、逃げてしまったのかしら。

あの子も、案外薄情ね…。まだ見つからないのよ。」

王子さまは長いこと縛りあげられて
固まってしまった関節を鳴らしながら、
「ふうん」

と興味なさそうに呟きました。

女王さまはその態度を見て、少し首を傾げたようでしたが、
すぐに柔らかに微笑んで、

「それじゃあベリト。戦況を教えるから、玉座の間に行きましょう」と、王子さまを促しました。

王子さまは一つ頷くと、軽く俯いたまま歩きだしました。

王子さまと女王さまが並んで玉座の間へ向かう途中、
玄関口の広間へ差し掛かった時でした。

入り口の方が俄かに騒がしくなったと思うと、

青空の様な髪をなびかせ、

半ばしがみつく様な形で馬に乗った

青のお姫さまが駆け込んできました。

面喰っている女王さまとそのお付きの脇をすり抜け、
王子さまは流れるような動きで馬に飛び乗りました。
ハッと我に返った女王さまが

「ベリト、逃げるの！？この国を裏切るの！？」

と叫ぶと、王子さまは少し苦しそうに眉を寄せた後、
突き抜けるような声で叫び返しました。

「悪いな、キチガイはキチガイらしく、

キチガイみたいに駆けて行くって、相場が決まってるんだ！」

そう王子さまが言いきると、お姫さまが手綱を捌き、

二人を乗せた馬は出口に向かって走り出しました。

遠ざかる二人を指して、女王さまが高く叫びます。

「あの二人を追いなさい！殺してしまっても構わないわ！」

けれど、兵士たちが慌てて追う準備を整えている間にも、二人を乗せた馬は遠く遠くに走っていきます。

「手綱、貸せよ」

ある程度城から離れた所で、王子さまが声をかけました。

「それにしても、お前、馬には乗れるって言ったよな？」

しがみつくように馬に乗っていたお姫さまは、

手綱を引き渡しながら、頬を少し膨らませます。

「…こんなに暴れ馬だなんて聞いてません…」

「でもこいつが一番早いんだ」

「それはそうでしたけど…」

王子さまは、厩の中で一番毛の赤みが強い馬に乗ってくるように指示していたのです。

ただ、その馬は非常に暴れん坊で、王子さまくらいしか御せる人間は居ませんでした。

「…まあ、最初でこいつにあれだけ乗れば、十分及第点だ」

王子さまはお姫さまの頭をぼんぼんと撫でました。

お姫さまは少し顔を赤らめ、伏し目がちに問います。

「…これから、どうするんです？」

「…このまま森を通って黄の国との国境を抜ける。

あの国は移民も多いし、紛れ込むには良いだろう。

…そこで、暮らしを考えればいい。」

少し乱暴な計画ではありましたが、お姫さまは嬉しそうに、

「はい」

と微笑みました。

エピソード きおくにのふうふのつわさ

赤の王子さまが出奔したという噂は、瞬く間に大陸を駆け巡りました。

戦の強い王子さまを、殺すことが出来ずに逃がしてしまった赤の国の軍隊は、

それ以来、威を借る虎が居なくなってしまった狐のように、すっかり鳴りをひそめてしまいました。

捕まりたくない王子さまが他国に協力するのを防ぐ為に動かないのか、

それとも、赤の国の軍隊は王子さま以外はさして強くなかったのか、赤の国の軍隊が動かない理由は、噂では測ることができませんでした。

赤の国が戦争を止めてしばらく経ち、

赤の王子さまの噂もすっかり忘れられてしまった頃。

たくさんの、たくさんの噂の中に、

黄の国には腕の良い彫刻細工の職人が居るのだとか、

黄の国に、珍しく美しい紫色の髪を持つ子どもが居るのだとか、

黄の国の中に、とても美しい髪色を持つ、幸せそうな夫婦が居るのだとか、

そう言った噂が、いくつか紛れておりました。

けれど、所詮うわさはうわさ。

誰も、ほんとうのことは、分かりませんでした。

エピソード きのくにのふつふのつわさ(後書き)

色々と無理矢理ながらも、

このお話はこのエピソードでおしまいです。

彼らの行動の是非はまた次の機会に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8241o/>

あかのおうじさまとあおのおひめさま

2010年11月18日19時39分発行